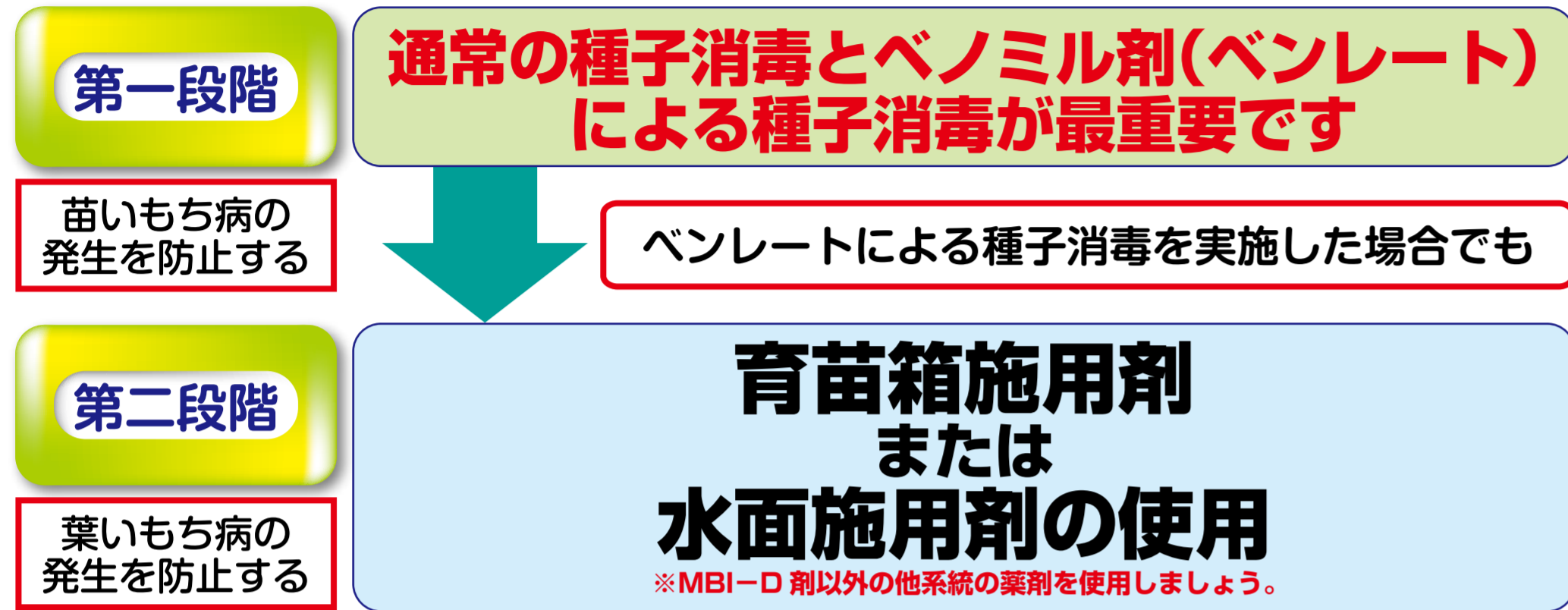


# 23年産水稲いもち病予防の徹底に向けて、 ベンレート剤の種子消毒に続き、育苗箱施用剤又は 水面施用剤による防除徹底を図りましょう！



道内でMBI-D剤(デラウスなど)のいもち病耐性菌が確認されました。昨年発生が多かったところでは、周辺に耐性菌が存在している可能性がありますので、同剤の使用は避けましょう！！

育苗箱施用剤、水面施用剤は本田でのいもち病の発生を遅らせ、基幹防除につなげる技術ですが、施用したからといって安心せず、発生予察はしっかり行い、いもち病の初発を見逃さないようにしましょう！

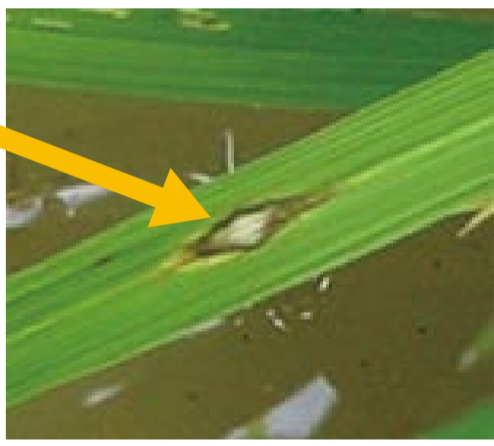
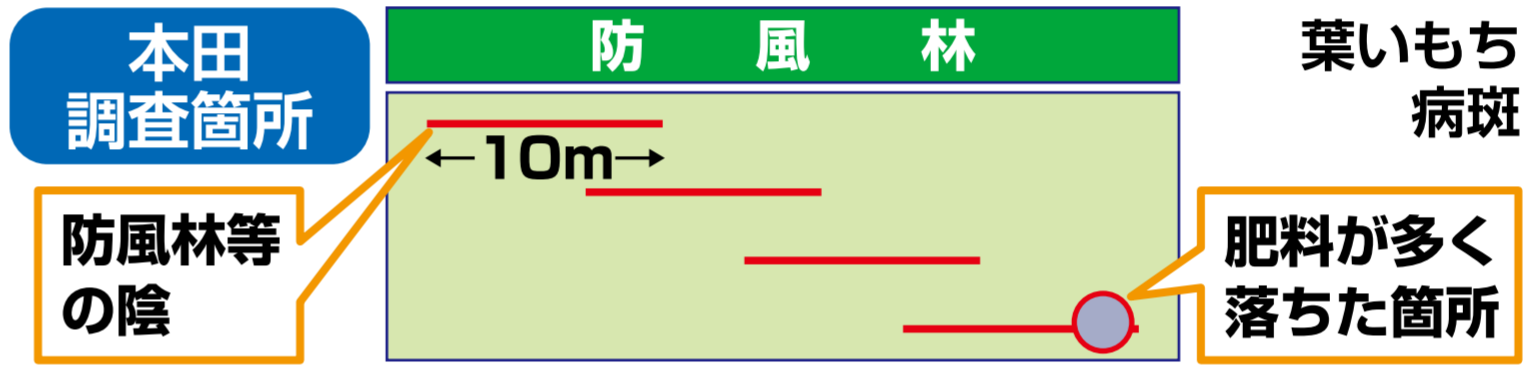
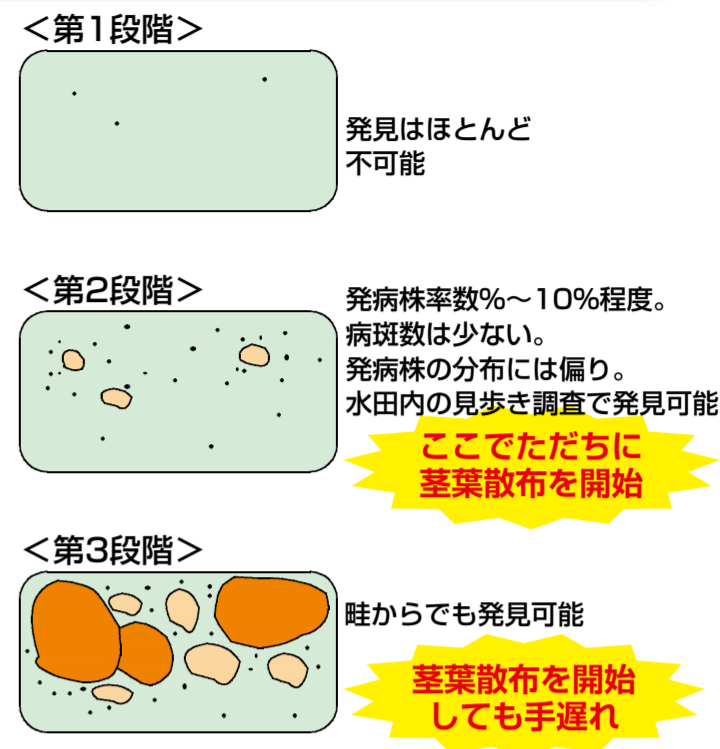
- 昨年のいもち病発生量から、全道でいもち病菌の密度が高くなっている。ベンレート剤で種子消毒を行えば、種子伝染のいもち病は防除できるが、圃場残渣などを伝染源とした本田での葉いもちの発生を抑えるため、MBI-D剤以外の系統の薬剤による「育苗箱施用」又は「水面施用」を行う。
- 葉いもちの初発確認を徹底し、初期の防除が遅れないよう注意する。
- MBI-D剤に対する「いもち病耐性菌」の拡大が懸念されるので、下記の薬剤の使用は避ける。

圃場周辺に耐性菌を含むいもち病菌が存在する可能性があるため、MBI-D剤以外の系統の薬剤で防除する。

**MBI-D剤の種類**  
ジクロシメット剤 (商品名：デラウス)  
カルプロパミド剤 (商品名：ウィン)  
フェノキサニル剤 (商品名：アチーブ)  
およびこれらを含む**混合剤**

## 第三段階 発生予察の徹底を

- 幼穂形成期5日後ころ、水田内を見歩き調査する。
- 畦から見て葉いもちが確認できる状態では手遅れ。
- 防除所・農業試験場・普及センターからのBLASTAM情報で感染好適日があれば早めに調査する。
- 調査は、**水田1筆につき圃場内の1畦につき10m、それぞれ離れた場所4カ所**を見歩きして調査する。
- 葉色の濃いところ、**防風林**や建物などの陰、肥料の多く入ったところなど、いもち病の発生しやすいところを重点的に調査する。
- 葉いもち病斑を1つでも見つけたら**すぐ防除を開始し、1週間間隔で基幹防除まで散布する。**
- 最初の防除が肝心で、遅れると短い間隔で防除が必要。



## 健康な稲の体を作る 耕種的防除対策も重要

- 育苗ハウス内およびその周辺での稲わらや籾殻の放置や利用を避ける。
- 播種の際、籾を露出させないように覆土をしっかりとける
- 土壌診断に基づいた施肥量以内とし、倒伏のない稲に仕上げる。珪酸質資材を投入し稲体を強化する
- 本田に肥料むらを生じないように、ていねいに施肥を行う
- 補植用の苗や取り置き苗は、早めに完全に処分する
- 幼穂形成期~7日後までの間にケイ酸追肥を行う
- ほ場の衛生に努め、しろ掻き後に畦畔にあげたゴミを適正に処分する。

